

元気に！子育てフェスタ in あいち

11月15日、ウィルあいちで開催されました。
CAPNAの呼び掛けで、多くのNPOが集まってスタートしたこのイベント。開催2回目となる今年のテーマは「つなぎあおう！人・情報・役割を！」です。その熱い願いを伝えるかのような充実したプログラムが繰り広げられました。

行政とNPO、それぞれの現場からの問題提起を10の分科会に分け、育児支援についての社会のあり方などが真剣に討議されました。

4階のステージでは威勢のよい和太鼓、若さと躍動感あふれるヒップホップダンス、ハラハラドキドキのジャグリング、心洗われる三重奏のコンサートなど、魅力満載で親子とともに楽しめるイベントが行われました。

また、2階のパネル展示の会場で行われた助産師による「妊娠～出産劇」(写真)は、妊婦さんと助産師のやりとりをもとに、妊娠・出産の流れを分かりやすく解説し、会場の若い女性の心を捉えていました。誕生の場面では、拍手がわいていました。



Book紹介

(注)本の価格は税別です。

「グロテスク」 桐野 夏生著 文芸春秋社 1905円



東電OL殺人事件など、実際に起きた事件をモデルにして書かれた犯罪小説。

なぜ、大企業のエリートと言われるOLが夜の街に立たなければならなかったのか。親が子育ての基本を『お受験』に置いている現実。そして家族関係が人格形成に与える影響の大きさなど、社会に潜む病理の怖さが読む人の心に迫ってきます。

(関連図書：「東電OL殺人事件」佐野眞一著 新潮社 1800円)

＜ お知らせ ＞

12月の市民講座はお休みです。次回は2004年2月26日(木)6時30分から名古屋市女性会館で。

講師は岡崎仁美さん(CAPNA 研修企画委員)です。

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(10-11月分、順不同、敬称略)

【団体】名古屋名城ローターアクトクラブ、代田中学校生徒の皆さま

【個人】服部恵子、祖父江美智子、岩城正光、矢満田篤二、山田裕子、ほか匿名の方3名

CAPNAニューズレター32号 (隔月刊16号)

2003年12月12日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

キャプナ★ニューズレター

21世紀は、憎しみとテロの時代に突入してしまったのでしょうか…。

そんな息苦しさを覚える年の瀬です。

2、3面で矢満田篤二理事のアメリカ研修報告を掲載しました。赤ちゃんや若いお母さんをきめ細かく支える社会システムに、ブッシュ大統領の強硬姿勢とは別の「アメリカ市民社会」の力を感じます。

不安な時代だからこそ、小さな笑顔を守る仕組みを、私たち自身の手で整えていかねば。来年も、CAPNAは元気に行動していきます。

皆様、よいお年を。

Vol. 32

親子の健康な出発のために・・・

米国児童福祉研修報告 矢満田 篤二 (CAPNA 理事)

本年4月、CAPNAなどの共催で、東京福祉大学のヘネシー・澄子教授を講師に迎えてアメリカ・オレゴン州の「健康な出発プログラム専門講座」を開講しました。今回、そのヘネシー教授のお世話でオレゴン州などを訪ねることができましたから、概要を報告します。

参加者は別記の10人。9月27日に成田から出発し10月5日に帰国しました。

内容はとても濃く、連日、午前7～8時にホテルを出発して、夜まで説明を受ける日もあり、夕食を兼ねた話し合いから戻ると午後9時過ぎになることも。

アメリカ連邦政府の関係者は、児童虐待防止に欠かせない育児不安の家庭支援事業を州全体で実施しているのはオレゴン州だけ。全米でいちばん充実している、と折り紙を付けているそうです。それが「健康な出発プログラム」です。今回、私たちはその実施状況をつぶさに見聞することができましたので、その一端をご紹介します。

研修第一日目の午前。まず、オレゴン州の首都セーラム市で州政府の子どもと家族の委員会(Children Families Commission)代表者から歓迎を受けた後、「健康な出発プログラム」の説明がありました。これは第一子を対象としており、虐待や放置など危険度の低い子どもは在宅でワーカーが家庭を訪問して支援し、危険度が高いと判断された子どもを緊急保育する方法をとっており、午前は、その一つ「家族の積み木保育園」を訪問しました。積み上げて家族を作るというのが名前の由来だそうです。

オレゴン州には被虐待児を保育する7つの緊急保育園があって、子育て支援が必要な親からの希望や地域の小児科医などから依頼されて入園させています。

入園児童の98%は貧困家庭。毎朝必ずシラミ検査を実施。三分之一はメキシコからの季節労働者などスペイン系で、英語を話せないため、スペイン語の出来るソーシャルワーカーが担当して面接し、危険度が高い子どもから入園させていますが、200人以上も待機児童がいます。

それらの子どもの家庭では、親にドメスティックバイオレンスや放置などが深めるので、夜、親業のプログラムを用意して親子の絆を深めるためのパーティーや楽しい遊び方を教えています。

子どもの70%から80%は、ひとり親で、ほとんどが母子家庭です。母親にパートナーがいても妊娠すると逃

げられて、出産後につきのパートナーが現れるといったケースもあり、被虐待歴がある母親などは、恋人を作り愛されたような気持ちになって自尊心を高めても、逃げられると自尊心が低くなるといった悪循環を繰り返しています。1か月に1回は家庭訪問をしており、問題がある家庭には1週間に1回、週末や夕方など家族に会える時間に訪問しています。米国では、1990年代から家族への援助の方法は、それまでの親の弱みを探って治療することから、親の強みを引き出すことに変化しており、親子をほめて励ますことに重点が置かれています。

3歳から5歳(就学前)までの子どもたちは1クラス9人で2人の保育者と3～4人のボランティアが付いており、2歳以下は1クラス7人になっています。特に乳幼児には同じ保育者が付くことを配慮しており、自宅のアパートから外へ出ない子どもが多いので、外で遊ばせる工夫を大切にしています。ここは夜間や週末に、裁判に関わっている家族が警備員による凶器チェックと監視付きで、子どもを親に合わせることもしており、子どもが盗まれないようにソーシャルワーカーが付き添っているそうです。

ケースワーカーに高い信頼

午後からは、少人数に分かれてケースワーカーの家庭訪問に随行。育児支援を受けている母親から、直接、感想を聞き、ワーカーが母親からどれほど信頼されているかを実感しました。



里親の2人(右)が訪ねた家庭。左端がニーナさん

愛知から参加した里母さん2名が訪問した家庭の主婦は日本人で、米国人と結婚した九州出身の方。ワーカー

一のニーナさんは日本語が話せないので、この主婦が両方の通訳を担当してくださいました。

日本では「親は何をしているのだからね」「子どもがかわいそう」など、周囲があれば指摘して若い母親たちが育児に自信を失うような言葉が多いのに、ニーナさんは「大丈夫、大丈夫、それでいいの」「専業主婦は24時間、一番大変な仕事をしているのだから援助を受けて当然なのよ」と言ってくれたのがとてもうれしかったそうです。日本の育児書を見ると、「おむつは18か月になったらはずさない」と書いてあるので、子どものトイレ習慣づけに失敗するとつい焦って、おしりを叩いてしまうが、ニーナさんは、「高校生になっておむつをしている子はいないから大丈夫。焦らなくていいのよ」など、安心させる言葉のかけ方がすばらしいそうです。

この夜は、郡の議場で、州、郡、市、NPOなど虐待防止と家庭支援の関係者や議員が参加して活動内容が語られ、セルフサービス式の夕食も用意されていて、和やかな話し合いでした。

親権停止と迅速な支援

第2日目は、オレゴン州対人援助局(Oregon Department of Human Services)を訪問。ここは虐待の結果、裁判所が子どもをとりあげて実親に親権放棄させるケースを扱い、養子縁組や里親委託による第二の家庭養育をはかっています。日本の児童福祉法に相当する連邦法は、「児童の養子縁組と家族安全法(Adoption and Safe Families Act)」ですが、オレゴン州は実親に責任を負わせるため、さらにきつい州法があり、親権の停止と回復の過程や迅速に支援する体制整備に舌を巻きました。

研修の後半は、ワシントン州シアトル市へ移動して子ども病院を訪問。極小未熟児病棟における親子の愛着形成の工夫などを院内で見学。つぎに先進的な家庭支援を資金面で支えている財団を訪問して、社会的な貢献内容を知ることでもできました。そこでは待機していた親族里親さんから貴重な体験も聞きました。

今回の研修では、ヘネシー・澄子教授が、企画から訪問先との折衝、ホテル予約、レンタカーの確保、長時間の通訳など、超人的な活躍をされました。夫のリチャードさんもデンバーの自宅から駆けつけ、ご夫妻でレンタカー2台を運転。しかし、お二人は謝礼を固辞され、せめてとお願いして、お二人の交通費と宿泊代を団員たちで負担しました。ご夫妻に対して、有益な研修が受けられたことを心から深く感謝しています。なお、この研修の報告集は、来年3月頃、冊子にまとめて発行する予定です。

参加者の声

研修では、ワシントンチャイルドトラストファンド(WCPCAN)の虐待・放置予防のプログラムが印象的でした。

ここでは、提示している8つの目標に該当する予防のプログラムの中から、連邦政府・州・寄付金などから集まる資金を渡すプログラムを選定しています。3年間資金援助をするだけでなく、プログラムに関わるスタッフの教育や支援もしています。

この機関ができたきっかけが、20年前に虐待に関心のある女性たちが州を動かして州法にしたということに驚きました。

予防には、早期介入が大切なこと、また、子どもの発達に大切なことを伝えるなどの全体の予防のこと、前向きなことをしていくことが大切という話に共感しました。

ここから資金をもらっているプログラムの中で一番興味をもったものは、父親への教育プログラムです。出産2か月前に夫を集めて、妻を助けて子育てすることがどんなに大切かを伝えます。具体的には、子どもをもつことはどのようなことか、出産後に妻はこう変わるだろう、人間関係がこう変わるだろう、妻が産後うつを体験するかもしれない、ということですよ。

保健センターでは、妊娠中の両親学級(早期からの育児支援が大切だと考えて知多市では両親学級を児童課と連携して力をいれている)を行っていますが、父親への情報発信はもっと具体的にしていかなければと感じました。(前田恵美さん・保健師)

日程

【9月27日】オレゴン州ポートランド市へ。【28日】日本人里親・高橋夫妻と交流。【29日】午前、州都セーラム市で州家族委任機関事務局から説明を受け、家族の積み木保育園訪問。午後、班別にマリオン郡とボーク郡のワーカーの支援家庭訪問に随行。夜、マリオン郡議員会議室でオレゴン州家族委任機関スタッフほか、子ども・家族福祉関係者と交流。【30日】午前、セーラム市の州家族委任機関事務局と州対人援助局訪問。午後、州家族委任機関事務局から州の児童福祉制度について説明、オレゴン州議会見学。【10月1日】ワシントン州へ移動。午後、マリーブリッジ病院で極小未熟児保育室と母子愛着形成の工夫を見学【2日】ケーシーファミリー財団シアトル本部を訪問、事業説明【3日】午前、ケーシー財団支部で親族里親から体験を聞く。午後、ワシントンチャイルドトラストファンド訪問【4日】シアトル発、成田へ。

参加者

浅野みどり(名古屋大学助教授)／和泉広恵(千葉大学／団体研究員)／勝亦悦子(東京・児童養護施設指導員)／久野由利子(一宮市・東京福祉大学・学生)／瀬戸口やゑ子(一宮市・里親)／野崎明子(東京・児童養護施設主任指導員)／細川明代(常滑市・里親)／前田恵美(知多市保健センター保健師)／矢満田篤二(小牧市・日本福祉大学非常勤講師)／濃邊智子(長野市・産婦人科医師)／コーディネーター澄子・ヘネシー(伊勢崎市・東京福祉大学教授)／リチャード・ヘネシー(デンバー市・元大学教授)